

令和4年度 第2回 小田原市社会教育委員会議 概要

- 1 日 時：令和4年8月31日（水）午後2時～4時
- 2 場 所：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、井上委員、齊藤委員、高橋大明委員、高橋正則委員、中島委員、箕輪委員、山岸委員
- 4 職 員：柳下教育長、鈴木文化部長、小澤文化部副部長、山下子ども若者部長、吉野子ども若者部副部長、田村生涯学習課長、小林文化財課副課長、佐次図書館長、澤地スポーツ課長、濱野青少年課長、加藤教育総務課副課長、蓑宮生涯学習課副課長、藤澤生涯学習課副課長、遠藤生涯学習課副課長、三浦教育総務課主査、藤平生涯学習課主査
- 5 傍聴者：なし

6 概 要

- 1 委嘱状交付
出席委員全員へ、教育長から委嘱状を交付した。
- 2 教育長挨拶
柳下教育長から挨拶をした。
- 3 委員紹介及び職員紹介
出席委員及び職員から、簡単な自己紹介を行った。
- 4 正副議長の選任
議長に木村委員、副議長に笹井委員が選任された。
- 5 報告事項
(1) 令和4年度主要な社会教育事業について
資料2に沿って、生涯学習課、文化財課、図書館、スポーツ課、青少年課から説明。
質問等を受けた。

【箕輪委員】17番の学校プール開放の件で、今年度、実際に小学校のプール開放されたところがあったか。

【スポーツ課長】小学校でのプール開放はなかった。

【箕輪委員】その代わりに、市のプールを利用するための補助券についての話を耳にしたことがあったが、どのようなものか。

【スポーツ課長】御幸の浜プール利用時の補助券や、市内のスイミング・クラブのプールの開放日に、それを使いたいという話があったが、相談で話が終わっており、実際にどうかというのは、まだ報告が来ていない。

【木村議長】コロナの影響で、各地区も団体も人集めに苦労している。だから、全然やらない自治会、会長も2年で任期が終わるところは、何も分からないで終わり、引継ぎができない。これがコロナでダメなので、もう中止だというのが一番楽だが、そうやっていくと地域のコミュニティがだんだん薄くなってきてしまう。やはりそれはまずいだろ

うということで話はしているが、誰が責任を取るのかという話になってしまう。その辺がこれから難しくなってくるのかと思っている。

【有賀委員】 ツーデーマーチは、今年は実施するのか。

【スポーツ課長】 ツーデーマーチは、例年2日間で行っていたが、今年は11月20日（日）、一日のみの開催となる。人数制限も設け、当日申込みはせず、事前申込み制としている。コースは、小田原市内を中心に箱根、真鶴、湯河原も含めた計5コースを用意している。パンフレット等を公共施設に配架するほか市のホームページで情報掲載しており、9月から始まる申込みの方法等は例年通りとなっている。

【齊藤委員】 青少年のところで、子ども向け事業が大変充実しているが、中学生、高校生、大学生に向けた事業が無いのではないかと思います。社会教育の今後のあり方にもつながるかと思うが、今、学校に行けない子どもも増えているので、昼間でも行ける子どもの居場所がとても大きくなってきている。事業を作る時に、フリースクール的な要素など、小学生以外の中高生の子どもたちに向けた何か事業が今後生み出せていけたらいいのではないかと思います。

（２）小田原市教育振興基本計画（素案）について

資料3に沿って、加藤教育総務課副課長から説明。

質問等を受けた。

【中島委員】 先程話があったように、学校教育が中心だったものが、生涯学習を中心にしたのはすごく理解できる。進学できない、フリースクール等に行かなければいけないというような子どもたちを、社会教育の観点で育てていくということが、子どもたちにとってもありがたいことなのだろうと感じた。

【高橋大明委員】 当校に限っての話だが、ボランティアの方がたくさん入って子どもたちを支えている。そういった点も、ボランティアコーディネーターとして計画に書かれていることがありがたいと思う。

【有賀委員】 施策の展開の中で、社会教育が一番にきているところが、そこを中心に考えていくイメージがとてもよく伝わったので、今までとはまた違った計画になっていくように感じた。

【木村議長】 有識者の人も集まって、これが出てきたということは、これからの時代は地域を含めた社会教育がキーワードになってくるのかと思う。

【笹井副議長】 以前、この会議で見せてもらった市の総合計画が良くできていて、その現状認識と、これからの教育の方向性がよく描かれていて、今回、それを体現したような教育振興基本計画になっていると思った。学校というのは、とても多様な機能とか、すごく大事なものを持っているので、生涯学習の中で学校というものを捉え直して、これからの学校はこうであるということを書いて欲しいと思っていたが、結構それが書いてあって、非常に嬉しく感じた。だから、ある程度の実現可能性がなければいけないと思うので、それを是非、実際のプログラム、施策、取り組み等に反映していってもらえたらと思う。これはいつ公表されるのか。

【加藤副課長】 9月15日から素案の形でパブリックコメントを予定しており、最終的には12月のタイミングで確定して行きたいと思っている。その後、冊子にして年度当初からスタートという予定になる。

ここに至るまで、学校教育の枠組みから生涯学習にどうつなげていくのかという発想が逆で、有識者の方からは、生涯の学びがある中での学校教育であるとの位置づけで、計画体系を見直す必要があるということで、かなり議論させていただいた。ご指摘いただいた内容から、乳幼児期・学齢期・青壮年期・高齢期という、学びの機会がどれだけあるのかを整理してから議論した方がいいのではないかとということで、このような表も整理した。社会教育、家庭教育は、やはり人生全般に関わってくる内容となる。乳児期の幼児教育、保育、あるいは学齢期の学校教育ということがあるが、我々としては、例えば、学校での学びがきっかけになって、その人それぞれの人生の学びにつながっていくということであったり、連続して学びがつながっていくというようなことを大事にしていくというのが、有識者会議での意見だったので、その方向性を生かして整理し、これから精査して行きたいと思う。

【高橋正則委員】 今回の地域とともにある学校というのは、非常にインパクトがあるように感じた。小・中学生は、本当に地域と一体であり、その時点で地域のいろいろな大人の人たちと関わっている人が、社会人になった時に、またそれが地域に還元してくれるサイクルを生む、と思っている。関わりが1/10が1/5になれば、かなりのパワーになる。それを拡大していく、それをどうやって継続させていくかという点が、全てつながってくる感じがする。

【齊藤委員】 生涯学習の中で「関わる力」をととても大事にされていて、すごくいいと思う一方で、関わらないで、のんびりゆっくりしたり、フリースペース的なものを求めている子どもがいるのかと思う。例えば16ページの社会教育の(8)関わり方のところに「課題解決」しか書いてなく、28ページの(8)の関わる力も、交流型と体験型だけになっている。一方14で「居場所づくり」というのがあるので、子どもへの救いの手は、社会教育と学校教育の連携の部分にあるのではないかとと思う。居場所のところで、昼間、年配の方しか来ないとかではなくて、子どもたちが学校に行けなかったら、ここへおいでという、そんな当たり前の社会にしていく方向性が小田原で打ち出せたら、すごく最先端になるのではないかとと思う。

【井上委員】 子どもの友達の中にも学校に行けない子がいる。行けない理由とか行きたくない理由とか、おそらく言えないから苦しんでいる。子どもの居場所もすごく大事で、地域でどうやって支えていくかということは大きな課題だと思うが、お母さん方の話を聞いて思うのは、親御さんの話を聞いてくれる場所があるのかということ。子育てに行き詰ったり、子どもの学校生活だとか、子どもが自分に言えない環境、関係性とか、そういう基本的な親子の関係の中につまずいて悩んでいるお母さん、お父さんも結構いると思うので、そういうケアをできたらいいかと思った。

【箕輪委員】 まずこの計画書を見た時に、こんなに子どもが少ないのだということに衝撃を受けた。また、少なくなってきた子どもたちのニーズは、本当に幅広くなってきていて、この計画が生涯学習の中の学校教育という捉え直しをされたところがすごいと思

った。社会につながっていく中で力を発揮するために、学校で学んでいるのだと思うが、学校に行けなくなっても、外で興味のあることに参加したことが学校の単位になったり、いろんな場所で学んだ一つ一つの行為が、その子のスキルとして、実績として評価されていくような仕組みが出来上がってくれば、中学、高校、大学等、それぞれステップを踏みやすくしてくれて良いかと思う。今の制度の状況だと、不登校になると高校を選ぶのも大変になってしまうし、自然と次の門が狭くなってきてしまうような印象があるので、多様な学びが学校に行っても行ってもなくても正当な単位として評価されるような仕組みができると良いと思う。

【山岸委員】親御さんの相談に乗っていく機会というのは必要だが、6ページに書いてある、家庭・地域の教育力の向上ということで、家族形態が変容したり、地域との関わりを持たない暮らし方が増えている中で、親御さんが地域に押し出す力があれば、親も子どもも出ていけるかと思うが、そこは難しい。では、その家族をどう引き上げて、どのように支えていくのか。つながりを感じるような地域の力があると良いかと思った。

6 協議事項

(1) 附属機関への委員の推薦について

資料4に沿って、生涯学習課長から説明。

協議の結果、高橋正則委員を推薦することとなった。

(2) 協議テーマについて

資料5, 6に沿って、生涯学習課長から説明。

【木村議長】皆さん、それぞれの立場で率直な意見を出してもらって、その後、次回、どういうテーマでいくか、事務局と話を決めていきたいと思う。是非、コロナの中での現状や、こうやったらいいのではないかという意見等あれば、ご発言をお願いしたい。

【有賀委員】今回のテーマは、平成24年度8月からの研究テーマ「小田原市の社会教育・生涯学習のあり方について」と、ほぼ内容的に同じようなテーマかと思えたが、これを元にして10年経った今、コロナ禍の現状を再検討して可能性を探っていくのか。それとも、10年前とは切り離して、新たな視点で研究テーマに沿ってやっていくのか、その確認をしたいかと思った。また、事務局案にある「命を守る」という新たな学びは、切り離せないというところで、盛り込んでいく必要があるかと感じた。

【井上委員】今度のテーマの提案が、平成24年から26年のテーマの発展版みたいなという話だったが、コロナになったことで、学校教育の中でICT化は、すごく進んでいると思う。なおかつ子どもがすごく私たちより対応が早いので、おそらく来年度あたりは、もっと加速していくことになる。親として、これから学校と保護者のやりとりが携帯とかスマホ一つでできる世の中でいいと思うが、すごく怖いのがマスクをしながら、人と目だけで話す、目だけで表情を判断するコミュニケーションしか知らない子どもたちになっていくこと。機械でしか対応できない、機械でやることがベースになっていくような教育にならなければいけないと思っている。一昨日、県社会教育委員連絡協議会の

研修に参加して話題になっていたが、親と子の縦の関係、同級生・友達との横の関係とは異なる、地域の大人などとの「斜めの関係」がすごく人生において、子どもの教育において大事だと勉強した。去年も一昨年も、学校側は最後は子どもの命が大事だからとして PTA の活動もブレーキがかかってきた。しかし、私の学校ではちょっとチャレンジしようと思い、なんとか学校内だけでイベントしようと思った。ただ、地域の人はまだ呼べないよということで、学校内とあとその親子、家族だけは入れてやろうというルールを作りながらやっている。学校単位の運営協議会の中でも話が前に進まないが、コミュニケーションが取れるために、学校と地域の人の関係をどうやって作っていったらいいのか。年に 4 回ぐらいしか話し合う機会がないので、もっと密に地域の事が入りやすいような学校づくりができればいいかなと思った。

【齊藤委員】社会事情を今考えると、大人は学び直しをする時代に入ってきているのかなと思う。

このテーマだと、一般の人が読むと、よく分からないテーマに多分なるので、シンプルなテーマにした方が良くかなと思う。例えば大人の学びのための生涯学習とか、大人の学び直し、要はリスキリングだが、企業だけじゃなくて、大人が、一地域の人として、自分たちがその仕事以外のその場所、小田原で言うと、ワーケーションが成り立つ地域かなとも思うし、そういう大人の学び直しができるようなエリアを作っていたら良いのではないかなと思う。この前、学会で話されたのが、オンライン化が進んでいるけれども、オンライン化が進んで歓迎しているのは、男性の要はパソコンで仕事ができる事務方のみで、むしろ、女性の方は二重ワーカーになって非常に苦しい家庭環境の状況にあるという調査結果が出されていた。女性は職場に行かないと仕事ができないような、人に対面するような仕事をしている方が非常に多く、例えば、夫が家で仕事していて、夕方になると「ご飯まだ？」みたいな感じになったりとか、そういう二重ケアというか、家の中のケアと外のケアという二重構造になっているので、決してオンライン化が歓迎されているものではないということだった。一部の人たちの通勤時間が無くなったことのみが特化されているが、そうでもないということが、調査結果に出されたということがあった。今多分、30 代、40 代、50 代でも半分ぐらいの男性、女性もそうだが、結婚してない人も多いと考えると、よその人たちが普通に子どもたちの面倒を見ることができる、そういう社会環境づくりがとても重要になってきているのではないかな、これだけ子どもが少なくなっているから、本気で大人が学び直して、全く結婚しなかったり、子どもがいなかったりする方でもお子さんに関わったりとか、いろいろな多様な人たちに关わるような環境整備は、今後は小田原市内全域で必要なのだと思う。小田原に限ったことではもちろんないが、それこそが新しい生活様式になるのではないかなと思っている。テーマはシンプルで分かりやすい方がよく、どこを集中的に変更していくのかということ話をした中で、その周辺が明らかになってくるかなと思うので、これまで扱ったことがないキーワードを扱って見た方が良くのではないかなと思う。

【高橋大明委員】質問になるが、先ほど教育振興基本計画の中で、これまで学校教育に特化していたものが、ここで生涯学習の学びの上に学校教育があるとのことだが、今回のこのテーマがそこどう結びついて考えられているのか。学校教育イコール教育というイ

メージが強いと思うので、その辺が曖昧だと、生涯学習の中の学校教育とか、社会教育が学校教育を引っ張っていくというのが、曖昧なままで行ってしまいかねない。またこのテーマの中で我々が社会教育委員の活動として、何をどう調査研究していけばいいのか。

【生涯学習課長】少なくとも、今回の決まったテーマで2年間の中の話が、今回の基本計画とか、教育大綱と齟齬をきたすことはないというのがまず大前提にある。それで今回、割と広めと言うのは、まず第1の投げかけとしてあったのは、その教育振興基本計画にも関わるようなところに、小テーマが出てきてもいいかなということを思っている。先ほどご意見にあった「大人の学び直し」が、小テーマにもあってもいいかと思う。先ほど子どもが少ないという中で、その子どもさんの育ちを支援するのは、今までは保護者がという意味での家庭教育支援だったが、もう少し広く捉えて、地域の方から支援していくあり方もあるのではないかとといった話があってもいい。背景にはコロナ禍があるから、ICTを活用して、新たな学びの機会を得る人というのも出てくる可能性もありつつ、逆にやはり集うことも大事なので、どうやってもう一度盛り直してくのかという議論もある。今は、皆様から現場の声を聞いた中で、少し精査して、絞り込んでいくことを考えていきたいと思っている。

【高橋正則委員】「新しい生活様式」ということについて、木村議長が言ったように、一人なら前へ進もうよとなるが、人が集まると後退する。これはコロナが始まる前の時代に戻らないのではないかという気がする。企業もテレワークを導入している中で感染が極端になくなら3年前に戻るのか。ものづくりの生産工場はコロナ禍であっても通常どおり、本社機能は半減したり、1割が出勤でローテーションを組んで出て、週に一回打ち合わせで顔合わせましようと言っていた。これが当たり前になって来るのではない。ただ、このコロナ禍で一番困ったのは営業だと思う。外出てお客さんと対面しなければ営業につながらない。直接会えば、お互いの目を見て話をして、お互いの誠実さがわかるけど、映像を通して誠実さは100%を理解できるのか。新しい生活様式、もうすでにそれに向けて動いている企業なり、一般の人たちはいると思うので、本当にコロナを言いわけにしない年が来てから、その辺に手を付けていかないといけない。

自治会の防災活動で大事なことにテント張りがある。ただ、防災訓練がなかなかできないと、自治会長や役員など数年で交代するから、誰もテントの張り方を知らないという状況になってしまう。健民祭も地域の人が集まってテントを張る機会なので大事である。そういう大切な勉強の場が一つ一つなくなっていく。そういう機会で、新しい生活様式を見出して行く。我々は対面で人と人のふれあいから友達の輪を作っているけど、ICT化が進んで、今の子どもたちはなかなかそれができない。ICTを逆に我々の年代は教えてもらわないと今の生活の中でやっていけない状況である。そういう意味では、年配者が、今のこのコロナ禍で知識が豊富になった子どもたちを先生にして教えてもらう体制も必要になる。コロナを前提にしない新しい生活様式を念頭にしながら、地域と学校のあり方も先ほどのことを含めて、テーマにしたらいいいのかなという感じである。

【中島委員】タブレット、ICTが学校現場に入って、学びを止めないという目的でオンラインの授

業配信などをしてきたが、学校は変化や大変さとか、子ども同士の関係の希薄化とか、困っているという内容をお伝えすることぐらいしかできないと感じている。

タブレットが入ってきて授業形態も変わってきて、うちの学校は、朝来たら自由に子どもたちがタブレットを出して、朝の会の前に自分で調べ学習をしたりとか、そういう使わせ方をしている。ゲームを始める子がいるが、自分たちの中でそれに規制をかけていこうとしている。それが生涯学習や社会教育にどうつながっていくのかというのを見ると、代案がなくて大変申し訳ないが、このテーマだと自分は発言がし難いと感じている。

【箕輪委員】私も 10 年前の刷新、それを踏まえて 10 年経って変わって、さらにコロナもあって、また更に新しいのが求められているということなのか、それとも、題名は同じような形だが、全く違うのかどうなのかということが一番に思った。裏面に書いてあるいくつかの中で、私は、保護者としての立場、今活動している中での立場、両方思うところがあるが、子どもたちのコミュニケーションの取り方に心配を持ってしまう。パソコンを通して授業を受ける機会があったが、画面に写っている子どもたちがマスクをしている。顔を出すのが子どもたちの中でも「ちょっと嫌だ」というのが、少しずつ定着化してしまっていないか、ショックだったところがある。確かに ICT 化が進んで、どんどん自分で調べるし、新しいことを見つけるし、世界が広がっているのかもしれないが、子どもと遠い世界とはつながっているが、お隣の人との距離がすごく遠くなってしまったのではないのか。もう一つ心配として、防災の活動をしている視点も付け加えさせていただくと、非常時は、近所とのつながりが一番大事だと思っているが、普段話していないのに、大変な時だけつながれというのは難しい。そう考えたときに、何気ない立ち話とか、無駄な時間こそが豊かであったと感じていることが多い。そういう余白の話で信頼関係が少しずつ育まれていって、いろんな話ができるというところが、今一番足りていないのではないのか。信頼関係をどう再構築して行くのか。皆でできる方法を探そう。そこがコロナの次のところで一番肝になってくるのではないのか。

【山岸委員】8 月の初めに自分自身がコロナにかかった。その前から新しい生活様式での生活を仕事に対してはできたので、何かあれば skype で顔を出して話ができただけ。ただそれも、ビデオをオンにしないと、相手が私の発言にどう反応しているのかということが分からないので、顔は出してほしいということは言っていた。だからデスクワークの人間であれば、つながろうと思えば、仕事としてはつながれる環境にはもう皆なっている。一方で、通告が増えたと言っているけれども、実際、通告は減っている。学校が休みになって子どもたちが出て来ないので、一昨年度の学校からの通告は減っている。民生委員さんと話をした時は、家庭訪問に行っているおじいちゃん、おばあちゃんの家に行けなくなり、様子が見えないので、弱者というか、本当はつながらなければいけない人たちとの関わりは、見落としがちになる。方法を考えないと、本当につながらなければいけない人につなげることができないという印象である。

【笹井副議長】10 年前に同じようなテーマでやっているが、当時はコロナがなかったわけだから、今回は、ゼロベースでやるのかなと理解した。つまり、そのコロナで我々の生活が大

大きく変わってしまったことが前提にある。だから、今の時点の状況からどういうふう
に社会教育を作っていこうかと捉えた。そうすると、まず、対象層、年齢層によって
コロナの影響は違うわけだから、対象の共通理解を持っていないと議論が拡散するの
ではないかなと思った。それから、社会教育・生涯学習は、これはすごく広い。社会教
育は人と人とのつながりの中で学び合うというのが社会教育、生涯学習というのは、
そこにプラスして、個人学習、個人でいろいろ本を読んだりするのも生涯学習、ある
いは大学で学び直しをするのも生涯学習である。その広がりが大きくなまま議論した方
がいいのか。また、コロナによって、企業や学校の ICT 化が進んだ一方で、その企業
や学校の中で困っている人もいる。ICT のもつ問題性だけではなくて、孤立孤独がもっ
と進んだという側面もある。大学でも「鬱病」の診断書を送ってくることもあり、若
い人でも深刻な、孤立孤独がもたらす弊害みたいなものが、昔からもそう言われてい
たが、コロナで一層進んだのではないかなと思う。そういうふうな社会参加の問題に焦
点を当てるとか、もうちょっと何らかの形でぐっと絞り込まないと議論拡散するのみ
ならず、なかなか答えが見出せないみたいなところがあるのではないかなという印象
である。

【有賀委員】今回、平成 24 年度のテーマを意識されて、事務局案を出されたのか。そうであれば、
コロナ禍を踏まえた新しい生活様式で研究を進めていくイメージはしやすいのかなと
思ったが、その辺の意識はどうだったのかお聞きしたい。

【生涯学習課長】10 年前に作っていただいた研究成果を基礎とは思っている。押さえておくべき
事は押さえておきつつ、新しく課題が出てきたことについて、学びをもう一度、盛り
上げていくにはどうしたらいいかという方向に進めればいいかなと考えている。10 年
前は諮問・答申という形をとっていたが、今回は、教育振興基本計画を実践していく
中での、アプローチの仕方を提言できればいいかなというふうに考えている。皆様の
意見の中で、対象やテーマを絞った方が良いとあったが、一つのテーマに絞り切ると
いうより、教育振興基本計画の中で、学校教育から広がり、生涯学習が新しく大きな
柱になっているので、その項目の中からいくつか話していきたいと思っている。ま
た、家庭と地域と学校とをつなぐ中での命を守る教育、防災はすごく大事なところか
なと思っている。コロナ禍の中で、余計その時だけ何か集まれるかというときに本当に難
しくて、ご近所の方との関係性をどうつないでいくかというの、一つのテーマにな
ってくるかなと思っている。

【有賀委員】テーマを設定するにあたり、社教委ハンドブックの 17 ページに、昨年度の主要な自
治体のテーマが載っている。例えば茅ヶ崎市とか平塚市、あるいは真鶴町あたりだと
割と具体的に「コロナ禍における生涯学習・社会教育事業のあり方」と書いてある。
サブタイトルもついているので、この辺りも参考にしてテーマを決めていったらどう
かなと思う。

【生涯学習課長】参考にさせていただきたい。

【高橋大明委員】この協議が 2 年をかけるとすると、2 年後、ひょっとするとコロナも完全に明
けている可能性もあるかもしれない。コロナが明けた時のことも想定したことが必要
なのかなと思う。

【生涯学習課長】 そのあたりも視野に入りたい。

【木村議長】 皆さんからいろいろなご意見をいただいた。これから事務局の方でまとめてもらって、次回には、こういうテーマで絞っていきましょうという話が出てくるかと思う。それはそれで、また一つとしてやっていかなければいけない。平成 24 年の社会教育と生涯学習のあり方というテーマで、これは教育委員会の方から諮問が出て、皆さんと討議して答申をしたと、それに、この新しいこのコロナの関係で、大分その頃とはまた変わっていると思う。一番変わっているのは「地域」だと思うので、地域が廃れてくると、もうコミュニティが完全に崩れて、もうどうにもなくなってくる。その辺を考えていかなければいけないというのはある。

その他、事務局の方から何かあるか。

【事務局】 次回の会議は 11 月の開催。それから今年度はもう一度 2 月の開催を予定している。

【木村議長】 それでは、これをもって、本日は終了とさせていただきます。